

職業希望に関する意味世界の計量テキスト分析

——中学生と母親パネル調査 (JLPS-J) データを用いた分析 (7) ——

法政大学 多喜 弘文

1 目的

社会階層論や教育社会学などの分野において、生徒が将来つきたいと思う職業に関する意識（以下、職業希望）はたびたび検討の対象となってきた。そこでの職業希望の測定は主に2つの方法によってなされている。1つは、あらかじめ調査者が用意した選択肢の中から選んでもらう方法、もう1つは、自由記述で記入してもらった回答に、調査者が事後的に何らかの職業分類に基づいてコードを与える方法である。先行研究によると、前者の選択肢方式では無回答者が少ないが、後者では回答の欠損が多くなる。後者では、職業希望未定や無回答が増えることに加え、具体的な職業名だけでなく「会社員」「公務員」といった職業コードが与えられない回答が頻繁に生じるからである。

しかし、具体的な職業コードが与えられない自由記述も、内容を詳細に検討することで中学生の職業希望を考える上で何らかの重要な手がかりとなる可能性が考えられる。選択肢方式の質問は、調査者の想定する枠組みに沿って標準化された形で測定するには適しているが、それが調査対象者の職業希望に関する意味世界とずれてしまっていることも考えうるからである。本報告では、このような問題関心のもとに、職業希望に関する自由記述回答を KH Coder (樋口 2014) を用いた計量テキスト分析で詳細にみていくことで、職業希望に関する中学生の意味世界の検討をおこなう。

2 方法

本報告で使用するデータは、「中学生と母親パネル調査 (JLPS-J)」である。この調査は、2015年10月から2016年1月に全国の中学生とその母親を対象に実施された (N=1,859, 有効回収率 45.0%)。分析では、職業希望に関する選択肢方式と自由記述方式の質問項目に加え、将来の教育期待や仕事に対する価値観などの変数を主に用いる。

3 結果

計量テキスト分析を用いた検討の結果、選択肢方式の事務職や管理職といった回答には、先行研究が仮定してきた通り「会社員」「企業」「安定」「公務員」といったイメージが結びついていることが明らかになった。海外と比較した場合、事務職希望者が多いことが日本の生徒における職業希望の1つの特徴であることが知られているが、「職務のない雇用契約」などの日本的雇用慣行がこのような特徴を生み出す制度的文脈であることがあらためて示唆された。

4 結論

地位達成研究の研究枠組みは、学力の高い生徒ほど高い地位の職業につこうとすることを暗黙裡に想定してきた。しかし、日本の生徒を対象とした実証研究は、そのような枠組みを日本に当てはめることに疑問符を呈してきた (荒牧 2001, 有田 2002, 多喜 2015)。こうした齟齬が生じる理由は、日本の学校と職業の制度的リンケージに着目することではじめて理解することができる。このことは、生徒の職業的地位達成を研究していく上で、その社会の埋め込まれている制度的文脈を考慮した研究枠組みの構築が必要であることを示している。

文献 樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版。

付記 本研究は JSPS 科研費 15H05397 の助成を受けたものです。